

—檜原村の南秋川・人里探訪— (11)

(記 岡本)

武蔵五日市駅9時発(令和5年2月25日(土))の数馬行きバスに乗車した登山客は、4名と少ない。南寄りに昇った太陽の周りに少しの薄雲が纏わりついているのみでほぼ快晴だが、夕方まで崩れなければ良いがと期待する。バスは南秋川沿いの檜原街道をくねくねと巧みに走行し、駅から40分程で人里(へんぼり)地区の最初の集落和田にある下和田バス停に着く。降車したのは自分のみである。

人里地区は和田、事貫(ことづら)、上平(かみだいら)、笛吹(うずしき)の四つの集落から成り、南秋川筋でも明るい谷間の部分である。

下和田バス停前から一車線の旧街道に入る。南側に南秋川が瀬音を立てて爽やかに流れている。旧街道に入ったところで、庭に出ていた年配者に対話の緒を求めて「これは蠟梅ですか」と尋ねた。「そうだ。味の素の素の字に心と書く素心蠟梅だ。」と返ってきた。これを切っ掛けに対話を紡いだ。嘗て家の前の旧街道にバスが通っていたが、山側に二車線の新街道が開削されて移った事、嘗て林業、薪炭、養蚕が生業だったが、現在は製材会社に就労する若干の者以外は殆ど村外への勤め人になっていること等実感を込めて話していただいた。当の年配者の家も2階を養蚕に使用した大きな農家である。庭には蠟梅の他に村から名木に指定された榎の老木が蟠踞していた。参考までに、村の産業資料(令和2年4月)では林業・農業など第1次産業54人、建設・土木など第2次産業276人、観光・交通・役場など第3次産業818人とある(人口2125人、1156世帯)。また、ある家の庭先に1m四方の防火水槽と1m程の自然石の「水神宮」を発見した。庭の直下に滔々とした流れがあるのだが。



下和田バス停から500m程旧街道を進むと、バス通りの新街道に出る。珍しく信号「人里」がある。この辺りが事貫で北の山側に臨濟宗の玉傳寺と学校跡がある。信号脇の階段先にある玉傳寺の庭は、京都南禅寺の石庭を想起させるもので、眺めていると何かを諭されているような気持ちになる。人里でこんな逸物を発見出来るとは予想外である。

学校跡は駐車場広場になっており、その一隅に三基の記念碑がある。「南秋川小学校、中学校跡」、「人里尋常小学校建立寄附芳名碑」、「南秋川小中学校建立寄附芳名碑」である。村内の学校跡を訪ねると、必ず寄付芳名碑をみる。その度に、集落の人々が日々の厳しい労働の稼ぎから寄付し、子弟教育に貢献してきた事実に感銘した。檜原村の学校教育は明治7年に檜原小学校と分校六の体制で始まり、事貫のこの地に第二分校として誠意小学校が発足、後に人里尋常小学校と改名された。その後、統廃合が繰り返されて、昭和61年南秋川中学校が檜原中学校に統合されたのを最後に人里から学校はなくなった。

人里を初めて見て「へんぼり」と読める人はまず居ない。人里(へんぼり)の名前の由来は諸説あって不明であるが、千数百年前当地に入植した渡来人の古代朝鮮語説が有力である。古代朝鮮語で人というフンと里(邑)というボルを重ねて人の住む里、フンボルと称したが、訛伝し、フンボリ、さらにヘンボリとなったという説である(檜原村郷土史)。

玉傳寺前の信号から旧街道の家並みを進むと、250m程先で新街道に合流する。西川橋バス停があり、その直ぐ先で人里沢に架かる西川橋を渡ると、山側の袂に通称(屋号)医者殿と呼ばれる文化

庁登録有形文化財(平成 29 年登録)の旧高橋家住宅がある。NHK の BS 番組「ふるカフェ系ハルさんの休日」(日曜日 8:30~9:00)で「古民家カフェ晴ノ舎」としてこの旧高橋家住宅が紹介された。ここで昼食を頂くことが今回の探訪目的の一つである。高橋家の来歴をみると、過去帳に鑑みて享保 13 年(1728 年)に没した人物が初代で代々養蚕農家であった。7 代の栄順(安政 2 年~昭和 11 年)は漢方医で式台玄関から駕籠に乗り山を越えて往診もしていた。昭和 52 年当時の当主は博士で都の衛生局長などを歴任した。さて、この住宅が文化財に指定された理由は、こうである。檜原村の茅葺き屋根は入母屋屋根を基本とし、両妻を切り上げる通常の兜造りに変化し、更に明治期



に二重兜造りに発展した(2013 年 1 月号会報「檜原の数馬探訪」を参照)。旧高橋家住宅主屋は、二重兜造りへの変遷過渡期に位置する建物として評価されたものである。建物は木造平家建て茅葺き(鉄板仮茅)で 185 平米、周りの家屋と比べても特に豪壮という訳ではない。主屋内の茶の間、内座、座敷、出居、奥出居の各間の敷居を払った大広間に、6 脚程の食卓を配しカフェを営業している。大黒柱の太さ、

障子の古典的意匠や畳の艶やかさ、沈んだ茶色を基調とした全体の色調に時代を閲歴した古民家の滋味が横溢していることに感服した。昼食に出てきた、生姜が効いた鶏と馬鈴薯の薬膳スープは、この味音痴にさえ至味この上ないと唸らせるものだった。1800 円は高くない。

医者殿から上へ 200m 程行くと、右の山側に五社神社の鳥居があり、そこから参道の急な石段が通っている。人里で最初に人が住み着いたところは、人里沢を中心とする上平であり、ここに氏神の五社神社が鎮座するのも頷ける。参道を覆う杉、檜の樹林の隙間から、人里地区が一望できる。南に秋川、北の山側傾斜地に開墾された畠があり、その中間に旧街道を挟んで家々が並んでいる。勿論田圃などない。ここに千年以上の昔から人が住んできたとは驚愕する。参道の石段脇に「念三夜塔」、「百番塔」、「聖徳太子」、「寒念仏供養塔」などが佇んでいた。急な石段が終わると、なだらかなセメント舗装の道に変わり、すると漸く石の大鳥居の元に本殿が現れた。大きくはないが、清浄感を湛えて好ましい。五社神社本殿内に六体の御神体があり、その中で等身大の蔵王権現と不動明王の二体(平安末期作)は昭和 31 年に都の文化財に指定された。仏像が社の祭神なのは神仏混淆の名残である。平成 24 年に修復の手が加えられたが、その際の寄付芳名碑をみると、上平の高橋某の 200 万円を最高額とし 1 万円まで多くの方が寄付している。檜原村からは 400 万円、都教育委員会からは 167 万円の補助金が各々拠出されている。本殿の標高は 628m で参道口の街道からは 150m の高所にある。石段は 478 段だった。(2019 年 10 月 26 日に五社神社~五台山~浅間尾根の一本松~人里峠~和田を山行した。山行回数 5683、山行報告 11 月号会報、小國記)



神社から笛吹入口バス停まで 1 キロ強の間は、途中の戸貫久保(とつらくぼ)バス停前に一軒の農家があるだけで、人家は途絶える。馬駐土(ばじゅうど)橋で南秋川を右岸に渡ると直ぐに笛吹入口バス停に着く。そこから笛吹沢に沿って笹尾根の笛吹峠方向に緩やかに登る。入口部分は地形的に狭いが、登っていくにつれ段丘が開けて家並が増す。

長閑な斜面である。入口から 150m 程入ったところで、道路の石垣上に大小 14 基の石仏が整列する異様な場面に遭遇した。3 乃至 4 基ならこれまで幾度も見かけたが 14 基は幾らなんでも多すぎないか。石仏は馬頭観音が多く百番塔等もあったが、他は風雪で痛み苔むして字面が読めない。笛吹は笛吹峠、小ゆずり峠で笹尾根を越えて上野原へ通じる主

要経路なのだ。馬頭観音が多いのも肯ける(入会前の2014年11月1日、浅間尾根登山口バス停～大羽根山～笹尾根出合～笛吹峠～笛吹集落～笛吹入口バス停のコースを山行した)。午前中の懸念が的中し雨が降り出した。花粉症も酷くなりだしたので笛吹の中心部あたりで踵を返した。古民家カフェまで戻り、コーヒーを飲みながら30分程バス時間を調整し、西川橋バス停から3時10分のバスに乗って武蔵五日市に戻った。

今回、沢山の石仏等を登場させたが、今回は探訪記事を中断し、檜原村の信仰について触れる積りである。

(了)

参考資料

「檜原村紀聞、その風土と人間」 瓜生卓造著 昭和52年6月刊

「郷土史檜原村」檜原村教育委員会 平成8年3月刊

「檜原村を学ぶみなさんへ」 檜原村立檜原図書館発行